２０２４年１２月２２日　青戸教会　「ヨセフのクリスマス」　高橋克樹牧師
聖書　イザヤ書７章１０～１４節、マタイ福音書１章１８～２３節

本日はマタイ福音書１章後半でヨセフに啓示されたキリスト誕生の知らせから、クリスマスの恵みの事実についてご一緒に考えてみたいと思います。キリスト誕生の出来事の物語において、主要な役割を担う人物でありながら、ヨセフは影が薄い人物です。神学生の時に１学年上の男性の先輩が「ヨセフはかわいそうだ。マリアと結婚しても、イエスが生まれるまで関係を持たなかったんだから」と真顔で言った方がいました。その発言を聞いたときは、思わず笑ってしまったのですが、けれども、よくよく考えてみると、ヨセフは育ての親ではあるけれども、マリアが聖霊によって身ごもったことを知った後、事後的に主の天使が夢に現れて「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」２０節）と告げられ、名前までも主の天使によって告げられてしまうのです。名前も名付けることができないで、全く育ての親の面目さえも与えられずにイエスを育てることになるのです。

さて、１８節と１９節を見てみましょう。「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることがあきらかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」。ここには、キリストが聖霊によって人間マリアの胎に宿ったことが淡々と語られています。１８節と１９節で、このような語られ方がされているのは、１章１節から１７節までで、キリストまでの系図が記されていて、その延長線上にヨセフがいることが確認されているのです。そして、１節から１７節まではこの世での普通の人間の誕生の系譜が語られているのですが、１８節の冒頭ではギリシャ語原文では、「しかし」を意味する「デ」が記されていて、それまでの普通の人間の誕生とは違うのだということが強調されているのです。イエスの誕生が聖霊によって身ごもったという点において、ダビデの系譜に連なるのであるけれども、これまでのイスラエルの歴史においても全く違う種類の誕生であると言われているのです。

当時の結婚観で言えば、ヨセフとマリアは許嫁（いいなずけ）の関係であったかもしれません。これは、互いの両親が幼少期に本人たちの意志とは関係なく、双方の親の合意出結婚が決められていたかもしれません。その次の段階では、本人同士がその結婚を了承して婚約するという段階です。ヨセフのマリアに対する心配りを見ると、聖書には何も書かれておりませんが、ヨセフとマリアは幼少期から互いによく知っていた者同士なのではないかと思われます。多田、子の婚約の段階は、現代と違って、正式に結婚が決まっていて、法的には夫婦とみなされる関係なのですが、まだ一緒に住むことはできない関係性が１年ほど続くのです。つまり、夫婦としての性的な関係を持つことはできないので、マリアが身ごもったという事実はスキャンダルなことなのです。ですから、マリアが聖霊によって身ごもった時期というのは、この時期の出来事なのです。ユダヤ教社会では、この婚約の時期に性的な関係を持つことはご法度ですから、マリアもヨセフも困った立場に陥っていたと思われます。

マリアが身ごもったということは、周囲の人々はマリアが不貞を働いたのではないかという疑惑にさらされることになりました。ヨセフは正しい人であったというのですから、ヨセフが妊娠

させたとは人々は考えなかったでしょう。ですから、１９節にあるように、ヨセフはマリアのことを表ざたにするのを望まなかったのです。この表ざたにするというのは、ヨセフは身の潔白を主張するけれども、マリアは不貞を働いたかもしれないということを公にすることです。ヨセフはその道を選ばなかったのです。ヨセフは正しい人だったとありますから、律法に照らしてみて、自分に何もやましいことはないということを主張しても良かったのです。けれども、そのような行動はマリアが石打ちの刑に処せられることになる危険性が高くなるわけですから、ヨセフはマリアの妊娠を表ざたにする道は選ばなかったのです。

どうも、マリアは自分が何故か妊娠したことをヨセフに話したようです。２０節で「このように考えている」とあるように、ヨセフはマリアから妊娠の事実を相談されて、表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心したのです。当然ながら、ヨセフはどのような決断をすべきか悩んだはずです。幼い頃からマリアの性格をよく知っていたヨセフは、彼女が不貞を働いたとは考えなかったでしょう。聖書には何も語られていませんが、ヨセフはマリアに対して深い愛情を抱いていたようです。けれども、その愛が真実であればあるほど、ヨセフの苦悩も大きかったはずです。

しかも、神はヨセフに対してもっと親愛の情を示しても良かったのではないかと思われるのです。ルカ福音書によると、天使ガブリエルはマリアに対して、「おめでとう、恵まれた方。主があなたたちと共におられる」と言ってから、「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を生む」（１章２８～３１節）と事前に伝えています。けれども、ヨセフに対しては、マリアが妊娠したあとに事後的に、主の天使が現れて、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と告げているのです。ヨセフに対しても事前に告げられていれば、ヨセフがマリアに伝えられた後に、あれほど悩むこともなかったのではないかとかわいそうに思えてしまいます。

けれども、神は、ヨセフがマリアとイエスをどのように処するかをしっかりと見ておられたのです。正しい人ヨセフは、同時に憐れみ深い人でもありました。神は主イエス・キリストの誕生に際して、ヨセフの憐れみ深い対応を見極められたのです。そこには、主イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスのとき、人間の側でヨセフが悩みながらも、マリアの人間性を損なわせることなく、イエスの誕生を待ち受けてくれたからこそ、私たち人類に救い主イエスが到来することができたことを覚えたいと思います。

確かに、憐れみ深い神は私たちの罪を贖うためにイエス・キリストをこの世に遣わしてくださいました。けれども、２０００年前のクリスマスのとき、私たち人間の救いのために、ヨセフという人物がマリアを通してイエス・キリストの誕生を待ち受けてくれたことを心にとどめたいと思います。私たちも主イエスキリストに救われて、罪赦されて生かされている者として、ヨセフに倣いつつ、この世の矛盾に対しても勇気をもって立ち向かっていくことができるように、それぞれの困難を抱えつつも、神に生かされた人生を歩んでいく一人ひとりでありたいと思うのです。ヨセフも、葛藤の中で、一人思い悩んでいた時に、主の天使が夢に現れて、進むべき道筋を示してくれました。主イエス・キリストをこの世に遣わしてくださった、この神に信頼を寄せつつ、自分が悩むことを畏れず、その悩みの淵にこそ神の御心が必ずやヨセフと同じように、私たちにも示されることを確信して、クリスマスから始まる１年を歩み通していきたいと思います。